



はじめに

夏のエドゥケーター研修の出会いから、ついにこの1月にフランス視察が実現した。行く前に異常な緊張感が訪れ、「何者でもないわたしが行く意味はなんだ」と揺れた。が、だからこそかなりの感受性のまま訪れることができたことは今でも幸いだと思う。

フランスを訪れ、教育や福祉の現場を見てまわるなかで、私は制度や支援技法の違い以上に、もっと根底にある「人の在り方」の違いを感じていた。それは明確な言葉として把握できるものではなく、むしろ身体感覚として残る静かな違和感であった。帰国後もしばらくその感覚は消えず、思考よりも先に身体の内側で反響し続けていた。私はこの状態を「未整理の風景」と呼び、帰国後すぐの個展では、その感覚を無理に意味づけることなく、そのまま場に置くことを試みた。フランスで体験した関係のあり方と、展示空間で立ち上がっていた現象には、深い連続性があるように感じている。

支援が「特別」でないという文化

フランスの現場で印象的だったのは、「支援している」という構えが前面に出ていないことである。しかしそれは関心が薄いということではなく、むしろ理念が深く内面化されているがゆえに、自然な振る舞いとして現れているように感じられた。あるエドゥケーターが語った言葉が強く印象に残っている。

「私たちは炎を燃やし続けるのです。理念を伝え続ける。それが仕事です。」

その語り口は決して熱く激しいものではなく、むしろ当然のことを確認するかのような静かな確信に満ちていた。支援とは技術の提供ではなく、理念を持続的に体現する営みであるという感覚が、そこにはあった。

大人たちは過剰に介入することなく、しかし関係の場に確かに存在している。子どもたちは守られている安心感のなかで、自分のリズムを保ったまま過ごしている。そこには「正しく導く」という規範的態度よりも、「共に存在する」という関係的態度が基調としてある。この差異は制度の違いというよりも、人間の尊厳 (dignité) を前提とする文化的基盤の違いであると感じた。尊厳は理念として掲げられる以前に、身体の振る舞いとして現れている。つまりそれは倫理というよりも、存在論的態度として共有されているのである。

「途中であること」を受け入れる社会

もうひとつ特徴的だったのは、人も関係も常に生成の途中にあるものとして扱われていることである。結論を急がない。評価を急がない。意味づけを急がない。この態度は、現象学におけるエポケー（判断停止）の社会的実践とも言える。判断をいったん保留し、現れている現象そのものに注意を向ける姿勢は、人間理解を固定化された枠組みから解放する。未整理であることが欠如としてではなく、生成のプロセスとして尊重されている点に、この文化の成熟を感じた。

展示空間における間主観的現象

帰国後に行った個展、「未整理の風景～Paysage non classé」では、作品そのものよりも、場における関係の生成過程を重視した。作品の前に立ち止まり、言葉にならない時間を過ごす人々の姿があった。そこでは理解や解釈が主目的ではなく、知覚と感情が静かに往還する時間が流れていた。観る者と作品、さらには場にいる他者とのあいだで意味が生成されるプロセスは、まさに間主観性（intersubjectivity）の現場であったといえる。作品は固定された対象として存在するのではなく、関係のなかで生成し続ける現象として立ち上がっていた。

また、即興書と音楽の時間では、身体の運動感覚と場に集う人々の生の時間が共感的に交差し、その場に立ち上がる志向性に応答するかたちで音が生成されていった。表現は主体を越え、身体と世界のあいだに生起する関係的現象として現れていた。

未整理という存在様式と援助の現象学

フランスでの体験と展示空間での経験は、援助という行為の意味を改めて問い直す契機となった。援助とは、相手を変化させることではなく、その人が世界との関係を回復する過程を支えることではないだろうか。

- ・未整理の状態に耐えること。
- ・即時的な意味づけを行わないこと。
- ・相手の時間性を尊重すること。

これらは技法というよりも存在論的態度である。人が安心して未整理の状態にいられるとき、関係のなかで自然な変容が生じる。その生成過程こそが援助の核心であると考えられる。私たちは世界を理解可能なものとして整理しようとする。しかし現実の経験は本来的に曖昧であり、完全に把握することはできない。未整理のままにとどまることは不安を伴うが、その不確実性こそが関係生成の余白を生む。フランスの文化に感じた確信に満ちた落ち着きも、展示空間で生まれていた関係性も、この余白を許容する態度によって支えられているように思われる。

未整理であることは未完成であることではなく、むしろ経験が生成し続けている状態である。すみあそびの実践、展示空間、そしてフランスでの経験は、いずれも同じ問いへと収束していく。人はどのようにして、自分のままで世界と関わることができるのか。この問いに明確な答えは存在しない。しかし未整理のままに立つことが、その問いに開かれ続ける態度であるといえるだろう。今後も私は、その風景のなかに身を置きながら、関係が生まれる瞬間に立ち会い続けたいと思う。（また不思議なご縁から、3/21~4/1はすみあそびをしにフランスに行くことになった。新たな機会に恵まれたこと、人生とは本当に何が起こるか分からない）

朱紅icco（櫻井育子） | 生涯発達支援塾TANE・はみだすラボ代表

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家・美術家。認知発達の視点からアートと生き方を統合し、既存の枠を外し続ける「フリーランス教育者」のオンラインサークル「はみだすラボ」を現在拡張中。Art Play Worker養成講座BASIC、第2期は5月開始（募集中）